



Title	大学の知を発信する：デジタルリポジトリとその周辺
Author(s)	土出, 郁子
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/14136
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大学の知を発信する：デジタルリポジトリとその周辺

大阪大学附属図書館学術情報整備室 土出郁子

1. 「機関リポジトリ」ってなに？

よく用いられる定義：

リンチ (Clifford A. Lynch) 2003 年

「大学における機関リポジトリとは、大学がその構成員に提供する、大学やその構成員により作成されたデジタル資料を管理し発信するための一連のサービス」ⁱ

クロウ (Raym Crow) 2002 年

「ある機関の教員、研究職員、学生により創造された知的生産物のデジタル・アーカイブで、その機関内外のエンドユーザにアクセス可能で障壁があるとしても最低限」ⁱⁱ

尾城 (尾城孝一) 2005 年

「機関リポジトリは、大学等の学術機関内で生産された、さまざまな学術情報を収集、蓄積、配信することを目的とした、インターネット上のサーバ」ⁱⁱⁱ

ポイント：

- ・発信者としての学内構成員へのサービスである。
- ・学内の様々な学術情報（教育・研究の成果）へのアクセスを Web 上で提供する。
→無料・本文まで利用可・永続的（機関が責任を持って保存管理・公開する）

リポジトリでできること：成果物の発信、Web 上での可視化、可視性向上

メリットらしきもの：

- ・著者にとっては、自分の研究を広く既存のコミュニティ以外にも知ってもらう
- ・機関にとっては、教育研究の内容を公開し、社会への成果還元、説明責任を果たす
- ・図書館にとっては、大学の知を全て集めてまとめて発信するという重要な役割を担う、発信者としての構成員の役割を支援する
- ・利用者にとっては、Web からストレスなく、機関の教育研究成果そのものを入手する

2. 機関の教育・研究成果を発信する

「発信者としての学内構成員へのサービス」

！ 教員個人，研究室・講座，部局（研究科・学部・センター等），機関

何を登録するか：著者が公開したいもの／ユニークかつ入手しづらいもの

いわゆる「灰色文献」

従来の出版流通にはのらなかつたもの

☺ 地方の大学ほど，網羅的に「成果物」を発信できるはず

memo1:Open Access

学術コミュニケーションと雑誌の関係

インターネットの登場による，新たなコミュニティの出現と，コミュニティ同士の重なり

Open Society, Open Science →情報工学の世界では早くから実現

「学術情報の発信を（ふたたび）著者の手に！」

3. 共同リポジトリ -ShaRe の報告書^{iv} から-

共同リポジトリ：複数の機関でひとつのリポジトリを運用

現在、国内の 8 地域で運用（山形、新潟、埼玉、福井、岡山、広島、山口、沖縄）

母体は、大学コンソーシアムや県大図協

システムの形態はいろいろ

☆費用負担

☆コミュニティ形成

（共同リポジトリ参加館のアンケートコメントより）

やってよかった点：

「コミュニティが拡がり、共通の課題として共有できる」

「アクセスが予想外に高い」

「地域での学術情報の共有」

よくなかった点、今後の課題や不安な点：

「機関リポジトリ自体の認知度が低い」

「ホスト機関に頼りすぎてしまう」

「担当者の異動等による事業の継続性に不安」

「予算／人員の不足」

4. 機関全体の事業とするために

a) 事務体制

リポジトリ自体は図書館主体ですすめることが妥当

まじめ・網羅性

専門性：メタデータ（目録）

！ 何より、学術情報と利用者（教員、院生、学生…）をつなぐ場所は図書館である

！ 図書館しかできない、手放してはいけない領域

「機関の情報」発信と位置付けると、他部局との分担が可能
学位（博士・修士）論文／科研／シンポジウム・市民講座資料／教材／
教員（研究者）データベースとの連携

b) 教員を巻き込む

- ・カウンターでの地道な勧誘：リテラシー教育支援やILL^vとの連動作戦
- ・記念インタビュー^{vi}
公開記念／登録件数〇件記念／アクセス数トップの先生インタビュー／イベントかこつけ記念 →館報・学報で派手に宣伝+DRFのMLに宣伝（DRFにもぜひご参加ください）

先生の口説き文句あれこれ

口説くための素材、ツール、調査、実験、プロジェクトは実はたくさんある
(ご相談下さい)

研究分野によっては、地域との協働にも利用できる
北海道大学観光学高等研究センターの例^{vii}

☆先生は研究内容についてしゃべりたい！！

☆コンテンツは増えるしかない
なぜなら、教員は教育研究の成果を日々生産しているから

memo2:著作権

☆ポイントは「誰が」権利を持っているか
→権利を持っている人が「公開したい」と言っているのであれば、全く問題なし

file 1. 登録したい人…著者個人

海外の雑誌に書いた論文を登録したい。投稿時に copyright transfer というのを出した。
日本の雑誌に書いた論文を登録したい。投稿時には特に何も言われなかった。

file 2. 登録したい人…紀要の編集委員会

紀要のバックナンバーを遡って全部登録したい。著作権については投稿規定に何も書いてない。

file 3. 登録したい人…著者個人

科研費の成果を登録したい。複数の海外ジャーナルに投稿した。

ⁱ Lynch, Clifford A. "Institutional Repositories: Essential Infrastructure for Scholarship in the Digital Age" ARL, no. 226 (February 2003): 1-7, 2003.
<<http://www.arl.org/resources/pubs/br/br226/br226ir.shtml>>

国立情報学研究所による和訳 : <<http://www.nii.ac.jp/irp/archive/translation/ar1/>>

ⁱⁱ Crow, Raym. "The Case for Institutional Repositories: A SPARC Position Paper" ARL Bimonthly Report 223, 2002. <http://www.arl.org/sparc/bm~doc/ir_final_release_102.pdf>
栗山正光・中井えり子「機関リポジトリ擁護論：SPARC 声明書」
<http://www.tokiwa.ac.jp/~mtkuri/translations/case_for_ir_jptr.html>

ⁱⁱⁱ 尾城孝一「第 8 章 機関リポジトリ」逸村裕・竹内比呂也編『変わりゆく大学図書館』勁草書房, 2005, p. 102.

^{iv} 共同リポジトリプロジェクト:ShaRe(2010.3)『共同リポジトリ報告書：国内の地域共同リポジトリの分析』<<http://www.lib.hiroshima-u.ac.jp/share/seika/ShaReReport.pdf>>

^v IRcuresILL プロジェクト『オープンアクセスと図書館：IRcuresILL プロジェクト報告書』
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?plugin=attach&refer=IRcuresILL&openfile=IRcuresILL_project_report_JP.pdf>

^{vi} DRF-wiki 「先生へのインタビューコレクション」

<<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?OAWeek%202010#pa6453c5>>

^{vii} 山村高淑「地域と研究者を結ぶプラットフォームとしてのリポジトリの可能性：研究成果を地域に還元するための HUSCAP 活用の試み」第 5 回 DRF ワークショッピング「2009 年、いま改めてリポジトリ」発表資料 <<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/39834>>